学校事例 3

教科内外に発表の場を設け生徒の考える過程を見取る

新潟県 長岡市立東中学校

長岡市立東中学校は、教科内外の活動を通して、定期考査だけでは評価しにくい思考力、判断力、表現力の育成に力を入れている。教科指導での口述試験やペア活動、教科外指導での「教科の広場」や行事などの活動が生徒の思考力、判断力、表現力を育む場となっている。

数値に表れにくい思考力、判断力、表現力こそ、学校で育てたい

長岡市立東中学校は、長岡市の市街地を学区に持つ中規模校だ。2009年に校舎を改築する際には教科教室型を採用し、授業は学級に固定の教室ではなく、教科の特性に合わせて作られた専用教室と、これに併設されたメディアスペース（教科の広場）に生徒が移動して行われている。

地域の教育熱は高く、保護者の学校に対する期待は大きい。同校は「授業がわかる生徒80％以上」「学校が楽しいと感じる生徒85％」など、学習から生活全般に至るさまざまな取り組みについて数値目標を掲げ、年2回実施する授業理解度意識調査、基礎力テスト、各種アンケートで成果を測り、保護者や地域に公表している。

生徒の学力や学習意欲は総じて高く、教科学力は全国や県の平均を上回る。しかし、そのような結果だけでは満足できないと、佐藤忠弘校長は述べる。

「文部科学省の全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査で測れる学力は、基礎・基本だと思います。本校の生徒は、テストの得点は良いのですが、学んだ知識や技能を状況に応じて活用する力、自分なりの考えや主張を根拠に基づいて表現できる力などはまだまだ不足していると感じます。このような数値に表れにくい力こそ、学校でしっかり育てていきたいと考えました。新学習指導要領でも表現力が重視されていますが、これまでの指導要領で示されていた『技能・表現』の表現とは求められている内容が大きく異なります。私たちは、その場の人間関係や状況に応じて知識を活用する力、思考・判断したものを表現する力こそ、これからの時代に求められる力だと捉えて指導しています」

同校は、この「状況に応じて自分で考え、

School Data

◎1934（昭和9）年開校。教育目標は「考える東中　いたわる東中　やりとげる東中」。3年前に改築された校舎は教科教室型で、各教科の特性に応じた教育を展開する。キャリア教育、環境教育にも力を入れる。

校長◎佐藤忠弘先生

生徒数◎ 448人　学級数◎ 12学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒940-0093　新潟県長岡市水道町5-1-1

TEL◎ 0258-32-2131

URL◎ http://www.kome100.ne.jp/higashi-jhs/

公開研究会◎未定

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

判断し、行動していく力」の育成を課題として、思考力、判断力、表現力を伸ばすための教科指導の充実を図ってきた。その中で特に大切にしているのは、それらの力を適切に見取り、指導改善に結び付けるための評価だ。生徒に本当に力が付いたのかを丁寧に見取ることが、更なる授業改善につながると考えるからだ。

では、どのような指導を通して、生徒が自ら考え判断した表現力を見取っているのだろうか。教科の授業と教科外の活動に分けて見ていく。

◎教科指導での取り組み 口述試験やペア活動で思考の過程を可視化

数学科担当の貝塚敦先生は、理解に至るまでの過程を自分の言葉で説明できる力を付けさせたいという思いから、授業にペアで説明し合う活動を積極的に取り入れ、学期に1回は口述試験を行っている。

例えば、方程式「$3x-4=x+2$」の移項なども含めた解答の過程を、全て言葉で説明させる。解答をノートに書かせると、生徒は容易に「$x=3$」と解答し、この式が「方程式」であり、解くために「移項」することも知っている。しかし、口述させると、多くの生徒が言葉に詰まり、成績の良い生徒でもうまく説明できないことが多いと、貝塚先生は話す。

「多くの生徒は、問題を形式的に捉えているだけで理屈が分かっていないため、言葉で説明できません。基本的な原理を自分の言葉で他人に説明できるところまで理解してはじめて、使える知識として定着したと言えるのです。例えば、『移項』という作業を『左辺と右辺が常に成り立つように、両辺に同じものを加減乗除した結果、移動したように見えている』と理解して処理しているのか、『方程式では符号を変えて反対の辺に移動させる』と機械的に処理しているのかでは、理解までの思考の過程や定着度は大きく異なるでしょう。口述は時間が掛かるため、頻繁に出来るものではありませんが、そもそもの理屈が分かっていないのか、理屈は分かっているけれども計算力がないのか、生徒一人ひとりの課題が浮き彫りになります。定期考査では見取りにくい、表現に至るまでの思考や判断の過程を評価するには、口述試験やペアで説明し合う活動は有効だと考えています」

技術科担当の髙橋清先生は、プレゼンテーション技能の向上と併せて自ら考える力を育みたいと考え、地元・長岡産の野菜をアピールするプレゼンテーション資料を2回作る課題を出した。

1回目は、基本的なプレゼンテーション技能の習得に主眼を置き、生徒に自由に資料を作らせた。出来た資料は生徒同士で見せ合い、改善点を互いに指摘させ、自分に不足している表現技術を学ばせた。

そして、2回目はプレゼンテーションの対象を「野菜嫌いな人」と設定し、対象に合わせて資料を作り直すことを課題とした。生徒は1回目に指摘された改善点を踏まえつつ、対象に合った追求の仕方や素材は何かを考えながら再度資料を作成した。

「野菜が嫌いな人向けなので、野菜が良い印象を与えるようにアニメーションを入れた方がよい」「言葉遣いを平易にした方が、親しみが湧きやすい」など、1回目の資料には無かったアイデアや工夫が見られた。また、資料にナレーションを付けるように指導したところ、録音した自分の声が思った以上に聞き取りにくいことに気付き、どうすれば相手に分かりやすく伝えられるかを考える生徒も

長岡市立東中学校校長
佐藤忠弘 さとう・ただひろ
「生徒を愛情深く育て、智慧を持ち、周りから信頼され、社会に貢献できる人に育てたい」

長岡市立東中学校
髙橋清 たかはし・きよし
研究主任、技術科担当。「生徒にとって最大の教育環境は教師。自身の成長が生徒の成長になると思い精進したい」

長岡市立東中学校
貝塚敦 かいづか・あつし
数学科担当。「生徒といつも喜怒哀楽を共有し、そして共感、共汗していきたい」

＊プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

いたという。

「育てたい力に応じて課題を分けて設定し、出来上がった2つの資料を比較することによって、生徒が課題をどう思考、判断し、表現を工夫したのかがより見取りやすくなりました。プレゼンテーションはあくまで表現方法の1つに過ぎません。それを通して、誰に何を発信するのか。その思考力・判断力を育みたいと考えました。基本的なプレゼンテーション技能だけでなく、対象に合わせて思考を働かせ、表現を工夫できたのか、その過程を評定値にも反映しています」と、髙橋先生は話す。

「深く勉強すればするほど、正解のない問題がたくさんあると分かります。大切なのは、正解を出すことではなく、自分で考えたり調べたりする過程だと考え、それを可視化できるような課題を出すようにしています」（佐藤校長）

防災教育を体系化し状況に応じた行動力を育てたい

今後の課題は、教科間の連携を深め、表現力や思考力を育てていくことだ。中でも「防災教育」は力を入れたい分野だ。保健体育ではけが人の応急措置など、理科では地層やプレートの仕組み、地震のメカニズムなどを指導しており、更に、学校全体で防災訓練を年3回行っている。この別々に行っている教育活動や行事を、今後は防災教育という視点で体系化・組織化していきたいと、佐藤校長は話す。

「2004年の新潟県中越地震では、県内で大きな被害が出ました。けが人が学校に運ばれた時の対処法、避難所となった時の配給食糧の活用など、身近に起こりうる状況に合わせて知識や技能を学ぶことで瞬時に思考、判断し行動できる力や、外部に発信する力を養うことが出来ると考えています」

◎教科外指導での取り組み①「教科の広場」での発信を通じて相手に応じた表現を考える

思考力や表現力を鍛えるには、他者からの評価が有効な材料となる。そこで、同校は教科教室に隣接している「教科の広場」（写真）を発信の場として活用している。ここは、該当教科の資料や学習教材などを展示するスペースであり、生徒会の委員会活動とは別に、公募制による「教科の広場運営委員会」が企画・運営を行う。委員会は1教科20人程度を上限とした1～3年生の混成であり、その教科が得意な生徒だけでなく、苦手な生徒も応募し委員となっている。

主な活動は、教科教室や教科の広場での教材の展示、教科イベントの企画運営、定期考査に向けた対策問題の作成などだ。これまで教科の広場の展示は、その教科が得意な生徒が興味のあるものを研究し、制作物を発表する場になりやすく、教科委員以外の生徒の目を引くものになりにくいという課題があった。そこで、教科委員以外の生徒にも興味を持ってもらえるようにするにはどうすればよいかを考えながら展示の企画をするようにとアドバイスをしている。

「その教科が苦手であったり、興味がない生徒にどのように興味を持ってもらうかを考えることは、相手を意識した発表力を身に付ける上でよい機会になります」（佐藤校長）

同校は教科教室型の校舎で授業を行うこと

写真　英語の「教科の広場」。廊下からパーテーションで仕切られただけの開放的なつくりになっており、生徒が気軽に勉強や会話が出来るスペースも設けられている

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

から、日頃から学校見学に来る人が多い。そうした機会も、生徒の表現力を鍛える場として活用している。

「初めて本校に来る大人に対して、どのように発表すれば教科委員の取り組みを理解してもらえるのか。大人に対して説明する場合は、発表の仕方や言葉遣いも変える必要があります。それらを考慮してどのように表現すればよいのかと、適切な表現を考えることが思考力、判断力を鍛えることにもつながると考えています。最近は、来校者から予想外の質問が出ても、自分なりに内容を理解して、自分の言葉で説明できる生徒が少しずつ増えてきました」（佐藤校長）

このような発表や質疑応答の場は、生徒が力を高める場であると共に、教師が生徒の思考力や表現力を見取る良い機会にもなっている。

また、教科の広場は、先輩やクラスメートの考え方、学習法などを学ぶ場でもある。どの教科も「先輩から学ぶ」をテーマに展示物に工夫を凝らし、理科では単元末に生徒が学習内容のまとめや振り返りを記入する「伸びよカード」を掲示。数学では、学習内容を丁寧に整理してある先輩のノートを展示して、優秀な先輩の思考過程が分かるようにした。「友だちの作品が参考になる」「興味を持って授業に臨めるようになった」といった感想が聞かれ、広場に集う生徒の思考力や表現力、学習意欲にも好影響を及ぼしている様子がうかがえる。

◎教科外指導での取り組み②
原稿を見ずに読み上げ 発表力・表現力を鍛える

教科の広場と同様に、発表力を鍛える重要な場は行事での発表だ。同校では、全校生徒の前で行う演説や発表は手元の原稿を読まずに「語る」ことが原則になっている。大勢に見られる＝評価されるという意識が、発表力を鍛えている。教師がそう指示したわけではなく、先輩の姿から代々受け継がれてきた東中生の誇りであるという。

始業式で学年代表が述べる決意表明、卒業式の送辞・答辞、学外からの見学者もいる発表会など、どの発表の場でも必ず目の前の相手を見ながら語る。1年生では丸暗記をする生徒もいるが、2・3年生になると原稿に目を落とすとしても、話の流れを確認する程度だ。途中で頭が真っ白になってつかえる生徒もいるが、それをとがめる教師や生徒はいないという。

また、複数の人々が繰り広げる議論の場では、自分の主張を的確に述べることも重要になる。

「子どもたちが出ていく社会には、自分への敵意を隠さない人、あえて意地悪な質問をする人がいるかもしれません。そういう人たちとのコミュニケーションでは、相手の気持ちを害することなく、いかに自分の思いを伝えていくかが重要です。人間関係の中で磨かれる思考力や表現力こそ、確かな学力の土台になると考えています」（佐藤校長）

今後の課題は教師のベクトルをそろえていくことであると、髙橋先生は強調する。

「思考力や判断力を鍛えなければならないという意識は、先生方で共有できており、各授業でそれぞれの先生が工夫をしていますが、学校全体としてどのように育てていくかについては、教科間の更なる歩み寄りが必要です。教科教室型校舎のメリットや教科の個性を生かしながら、教科間の連携を更に深め、表現や発表の場の工夫をして、評価をしていきたいと思います」

校長として心掛けていること

「子どもたちの最大の教育環境は、私たち教師である」。このことを自覚して、日々教材研究、教材開発に取り組むことを大切にしています。本校の課題である活用力、表現力を高めていくために「何でも挑戦・進んで実践・みんなに発信」を合言葉に、これからも生徒が主体的に教科運営に参画するような学校体制を工夫し、その成果を内外に公開することで評価を得ながら、更なる授業改善に取り組んでいきたいと思います。